

日本体育学会
体育哲学専門領域

会報

Vol. 23 (1), May 2019

記事

- ♪ 巻頭言
- ♪ 代表挨拶
- ♪ 体育哲学考
- ♪ 書籍紹介
- ♪ 私の研究
- ♪ 事務局より
 - ・第12期(2019-2020)運営委員選挙について
 - ・2019年度の活動計画について
 - ・住所等変更及びメーリングリストについて
- ♪ 次回定例研究会について
- ♪ 夏期合宿研究会について
- ♪ 次号予告

巻頭言

予期せぬ出来事

佐藤臣彦（筑波大学名誉教授）

退職後、丸7年が経過し、8年目に突入した。改めてこうした数字をみると、自分でもビックリである。光陰矢の如し。時の流れに容赦はない。

前回の巻頭言（『毎日が日曜日』の過ぎしかた」Vol. 20-2）が2016年8月のことだったので、あれから3年ほど経ったことになる。この間に、わが人生初の大きな経験をした。手術そして長期入院である。しかも、2年連続立て続けという念の入りよう。正直、そういう事態に立ち至ることになるとは予想だにしていなかったもので、言わば「不意打ち」を喰らったも同然であった。

一昨（2017）年3月の検診で肝機能に関する数値に異常が見つかり、種々の検査の結果、「胆管癌」と判明。日頃、家内には「我が家系に癌患者は出ていないのでそれだけは安心するように」と吹聴していた手前、意外な結果だった。何ごとにも例外はあるものである。予備的手術を経て、8月半ばに10時間を超える「肝臓右葉切除、胆管切除・再建」手術を受けた。術後、感染症や肝不全に見舞われるも、3ヶ月に及ぶ入院の末、10月下旬に何とか退院に漕ぎ着けることができた。

退院後は懸命のリハビリに取り組んだおかげもあって徐々に体力も回復、入院前の日常生活に立ち戻りつつあった。その流れの中で、昨（2018）年7月の箱根合宿研究会では、「『哲学する』ための基礎要件」と題する（若い人たちに向けた）講演をすることもできたので、自分としては順調な回復途上にあるものと考えていた。ところが、それから2ヶ月後となる9月の検診の折、今度は心臓に異常が見つかり、「冠動脈バイパス手術」が必要との診断がなされた。結局、退院後364日目にして再入院、またしても（大きな）手術を受けることとなってしまった。

2年連続での入院・手術という事態にいささかへこみはしたが、不思議なことに、前回（胆管癌）も今回（冠動脈狭窄）も「手術が不可避」との診断が下されたとき、心理的な動揺は全く無かった。「危険意識」の感度が低いのかも知れない。手術室に横たわったときも「不安」は全然無くて、「目が覚めなければそれまでのこと」と考えていた。幸い、2度とも何とか目覚めることができたわけだが、術前の「不安皆無」の心境は、「人生、終わるときには終る」という或る種の諦念だったのかも知れない。

2度目の入院は1ヶ月ほどで11月下旬には退院することができた。以来、またしても衰えてしまった体力・筋力を回復すべくリハビリに励んでいるが、再度の手術とリハビリを経験する

過程で自ずと考えたことがある。自分自身の「こころ」と「からだ」についてである。筋力や体力の衰えは如実に分かる。階段を上ることさえままならなくなるのである。見た目にも、大胸筋や僧帽筋、大腿四頭筋や腓腹筋などの萎縮は明々白々で、元スポーツマン？の体型とはとても思えないような形姿に零落れてしまった。（因みに、癌手術前に執刀医が「良いガタイをしますね」と言ってくれたので、てっきり褒め言葉だと思ったら、「こういうのは手術がし難いんです」ということだった。）「からだ」に関する外見上・機能上の変化・変貌について自己認識することは容易い。しかし、「こころ」についてはどうだろうか。

2度にわたる手術・入院を経験したあと、自分自身の知力や感受能力にどんな変化があったのか、これがよく分からないのである。つまり、「からだ」に関する変化・変貌については明確に認知できるものの、「こころ」に関しては、術前・術後における変化を全くと言っていいほど自覚できていない。これはどういうことなのだろうか。そもそも「こころ」については、入院・手術といった非常事態からの影響を受けにくいということなのだろうか。それとも、本当はそれなりの変化・変貌があるのに、ただそれを察知できていないだけなのだろうか。

これは「認識主体そのものの自己認識は可能か」という「自己言及のパラドクス」（＝ゲーテル「不完全性定理」）に連なる問題と言えるかもしれない。自分自身における変化・変貌に関して、「からだ」に対するのと「こころ」に対するのでは認知の度合いが全く異なっている気がする。つまり、「からだ」が認識対象であるのに対し、「こころ」は認識主体であって、それ自体を認識することは「自己言及のパラドクス」に陥ることになるようなのである。

話がややこしくなってしまった。術前・術後で自分自身の「こころ」がどう変化したのか、一向に判然としないのであるが、ともあれ、わが好奇心そのものは健在である。相変わらず、読書が途切れることはないし（むろん、ある程度ペースは落ちているが）、音楽もわが生活から駆逐されることはない。さらには（ヤフオクに填って）美術本や美術作品（油彩、版画など）蒐集に熱を上げているし、映画再生における音響システム更新（3D音響空間の実現）にも余念がない。こうした状況は術前と何ら変わっていないように思える。

また、読書についても、直近では、数年にわたり廁上で読み継いできた司馬遼太郎『街道をゆく』（全43巻別巻1）をついに読み上げた。先頃亡くなったドナルド・キーンが司馬を評して「大変な知識人」と喝破していたが、本当にそう思う。勉強になった。また、吉本隆明の影響で若い頃から「読まねば」と思っていた『ファール昆虫記』（奥本大三郎訳、全20巻、集英社）を読み進めている。岩波文庫版（林達夫訳）ではこれまで幾度となく挫折してきたが、新訳は仏文学者で昆虫研究者である訳者が何と30年もの歳月をかけて完成させた畢生の労作。誠に行き届いた訳業で、心底驚くべき昆虫世界へといざなってくれる。自らの無知さ加減を自覚するのにこれ以上の書物はない。

さらに遅まきながら、村上春樹も読み始めた。何となく6～7歳年下だろうと思い込んでいたが、最近になってほぼ同世代だと知った。彼の家が息子宅のご近所で偶々ジョギング姿をお見かけして親近感を覚え、読んでみようという気になった。二種類の『全作品集』を揃えて読み進めているが（計15巻）、彼の描く「風俗」には思い当たるところが多々あって、「嗚呼、そうだった」と共感すること頻り。何とか「村上ワールド」に分け入って行けそうである。

こうしてみると、身体的な回復については未だ途上の感無きにしも非ずであるが、感性的および知的側面については順調な助走が始まっている気がする。ともあれ、自らに残された時間はそんなに多いはずがない。何とか「ライフワーク」の完成に向けてわがエネルギーを傾注していきたい、と切実に思っている。

追記＝浅田隆夫先生が本年2月に逝去された。享年99。先生には本当にお世話になった。感謝の言葉もない。ただただ、合掌。

佐藤臣彦(tosato58@kvf.biglobe.ne.jp)

代表挨拶

体育哲学をめぐる冒険

関根正美（日本体育大学）

この度、体育哲学専門領域代表を務めることとなりました。2年の任期中、運営委員や会員の皆様からのご協力をいただきながら、研究活動のお世話をしていきたいと思っています。肝心要の事務局は引き続き高岡英氣先生が担当してくださいませ。庶務会計担当の運営委員として田中愛先生もお世話くださることになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

ここ数年の間に組織体制の見直しが行われました。前代表の深澤浩洋先生のご尽力に感謝申し上げます。会報 21 (1) における「代表挨拶」で、深澤先生がその経緯と会員の利益について執筆されています。規程を改定することは会員の権利に直結することですので、会員の皆様に対して大きな変化をもたらすものといえます。規程改定にあたっては、専門領域内で様々な年代の会員がワーキンググループメンバーとして参加し、時間をかけて慎重に議論しながら作成し、総会でお認めいただきました。結果的に「日本体育・スポーツ哲学会」の学会誌に本専門領域会員であれば投稿できるようになったことと、相互のイベントに参加できるようになったことは、大きな権利の拡充といえます。しかしながら、この急激な変化に戸惑いを隠せない方もおられると思います。今後は会員の権利を享受していただけるような運営を心がけていかねばならないと思っています。

これまで幾たびとなく専門領域の活性化ということが言われてきました。この点について少し具体的に述べておきたいと思っています。

まず、若手研究者の方々は、体育学会で「完璧な」研究発表をしなければ生きていけないなどと格式張って考えないでください。必死に勉強し考えたら、まず学会に参加し、発表してみてください。自分が質問し、自分に質問してくれた人と友達になってください。学会会場で気になる人を見かけたら知り合いになってください。互いに研究の話ができる友人、特に世代の近い他領域の友人を見つけて学会を楽しんで下さい。自分の研究を多くの人に知ってもらうようにしてみてください。そのことが自分の研究にプラスになり、ゆくゆくは「領域の活性化」につながるのです。中堅、ベテラン勢はどうすればいいのでしょうか。かつて恩師の片岡暁夫先生から、はがきで次のような言葉をいただいたことがあります。「昔の教授は最後まで探求者として発表したものです」。その時まで私は若かったのですが、今は恩師の言葉をいつも意識しています。中堅、ベテラン勢が学会などで権威者として振る舞うのではなく、研究者として生き続けることに活性化のヒントがあるような気がします。

哲学専門領域が健全に機能していくためには、必ずしも哲学を専門としない会員、専門外にもかかわらず「体育原理」を非常勤などで担当されている会員、とりあえず会費だけ払っている会員の方々の存在が重要です。そのような会員の方は、体育学会の会場をのぞいたり、合宿研究会や定例研究会に飲み会だけでもいいので一度参加してみてください。そこには権威者も指導者もおらず共に探求する者がいて、率直な研究の語らいがあると思います。体育哲学領域とは、そのような領域なのです。一人でも多くの人に、体育やスポーツの原理的な問題を一緒に探求する仲間に加わっていただければ幸いです。

関根正美 (msekine@nittai.ac.jp)

体育哲学考

体育・スポーツを日本で考えること

坂本拓弥（筑波大学）

以前、本会報の第18巻第1号(2014)に留学記を書かせていただき、その文章を次のように締めくくっていました。「体育・スポーツを『日本語で哲学(思考)する』ことの意味を、さら

に言えば、『日本語でしか思考(表現)できないこと』の意味を、少しずつでも考えていきたい」と。それ以降も折に触れて、自身の外国語能力に絶望するたびに、このことに思いを巡らせてきました。併せて、ここ数年は、日本の体育・スポーツ界における暴力の問題を考える機会が多くなりました。ここでは、それらを通して見えてきたことについて、1つの問題提起として示してみたいと思います。

その手がかりとして、1つの例を挙げます。最近では、大学で教員を「～さん」と呼ぶ学生がいます。このことの良し悪し、また筆者の周りだけの特殊な現象である可能性は、ひとまず置いておきます。いずれにしても、筆者がこの表現に強い違和感を覚えているという事実があります。学生から「坂本さん」と呼ばれたとき、直観的に覚えるこの違和感は、一体何を意味しているのでしょうか。もちろん、これまで「先生」と呼ばれてきたために、異なる呼ばれ方に違和感があるのは当然かもしれません。しかし、ここではあえて、そのように「～先生」と呼ばれることでしか円滑に流れないような、われわれにとって当たり前となっているその〈関係〉を問い返してみたいと思います。

冒頭に挙げた文章でも書いたように、筆者の少ない海外経験では、大学院生の多くが指導教員との関係を **with** と表現していました。そのことは、印象的であったと同時に、強い違和感を筆者に覚えさせました。日本で院生が、「どこの研究室なの？」と聞かれて「～先生と勉強しています」と答えたとしたら、程度の差はあれ、やはり違和感を覚えるかもしれません。なぜなら、われわれは **with** ではなく **under** の関係、すなわち「～先生のもとで勉強している」ことを、自覚せずに自明視しているからです。そして、この点についてはまったく同じ構造を、日本のスポーツ環境にも指摘することができます。

例えば運動部活動の場で、「～先生のもとで活動している」のではなく、「～先生とともに活動している」と自覚的に認識している生徒／選手は、一体どれほど存在しているのでしょうか。その希少さは、一部のトップアスリートが「～コーチ／監督とともに頑張ってきました」と述べるとき、それが1つの理想的な関係=**with** を象徴すると同時に、それがまた数多いアスリートのほんの一握りにすぎない現実を暗示することによって、われわれに理解されているはずで

です。運動部活動に民主的な人間関係や運営方法を、というスローガンは重要ですし、海外のスポーツクラブの優れているところを学ぶことも魅力的です。しかし、上述の違和感が示唆するのは、それらの活動を遂行するわれわれ（少なくとも筆者）の中にこそ、日本の体育・スポーツ界における様々な問題の根が存在している可能性ではないでしょうか。その根は、恐らく、われわれが自覚している以上に深く、そして強いものです。その深さはすぐには測れないでしょうし、またその強さは場当たりの取り組みでは歯の立たないものであることを、われわれは経験的に、すでに十分知っています。

このように考えてみると、われわれは学生や生徒／選手との関係の在り方を、改めて、われわれ自身に問い直す必要性に迫られていると言えます。学生の敬語ではない話し言葉＝タメ口、違和感と腹立たしさを覚えつつ、それらの情動の根を探ること。または、(指導教員はさておき) 職場や学会等で年長者に「～さん」と呼べない自分の内側を尋ねること。これらの事柄は、われわれの多くが学校に所属し、学生や生徒／選手と日常的に接しているからこそ、より自覚的になる必要があるように思われます。その〈学校的な関係〉の在り方を今一度問い直し、できることならば、**with** と **under** のあいだを自由に行き来できる〈しなやかさ〉を身につけ、またそれを学生や生徒／選手に身につけさせること。そしてそのために、その〈しなやかさ〉を探求すること。**under** の色が濃厚なわれわれ日本の体育・スポーツ界が、もしこれらを実現できたならば、そのときわれわれは、新しい倫理に支えられた世界をそこに見出すことができるのではないのでしょうか。

坂本拓弥 (sakamoto.takuya.ga@u.tsukuba.ac.jp)

著者のライト教授とは、東京学芸大学附属小金井中学校で行われたボールゲーム指導のワークショップ、そして 2015 年にニュージーランドで開催された Game Sense for Teaching and Coaching Conference でお会いした。「センス」という言葉は、日本語では生来の才能を指す響きがあるのだが、ライト教授ははっきりと、「センスというのは学習できるもの」とおっしゃったのを鮮明に記憶している。

日本の体育におけるボールゲーム指導は、特定のスポーツ種目のゲームパフォーマンス向上を狙った、イギリス由来アメリカ経由の“分解指導”が主流となっている。しかし、ライト教授をはじめ、オーストラリア、ニュージーランドを中心としたもう一つの潮流である Game Sense は、やや修正されたゲームを採用しつつも、「TGfU ほど構造化してもいないし、ややルーズである」。その代わり、学習ということについて十分に注意が払われていることから、私のようにスポーツ・トレーニングではなく、体育授業を対象とする者にとって、共感できる部分が多い。Game Sense と大文字のキャラクターを使って表記される場合、これは、構成主義に基づき、学習の文脈を重要視し、あるプレイがゲームのなかでどのような意味を持つか（make sense?）を問う、ライトらのゲーム指導法を総称することを意図している。

Game Sense は、しばしばイギリス発のゲーム指導である TGfU (Teaching Games for Understanding) と比較されている。彼は学習を、アクティブ、ソーシャル、そして解釈のプロセスをキーワードとして捉えている。そして「学習は実行可能な限り、ゲーム内に位置しており、発展させるスキルを事前に特定はしない」。ニュージーランドでも、少年たちを集めたクリケットの模擬授業で、少しルールが緩いゲームをさせながら、時々プレイを止めて、「今、ボールが向こうに転がってっちゃったね。どうしてそうなったの？」など、少年たちに行為の意味を問い掛けるライト教授の姿が印象的であった。「ゲームセンスは、学習者たちがゲームの中で生じた問題を協働的に解決することへと導くのであるが、それは教師が前もって用意した“正しい答え”の発見ではない」。つまり、それ（正しいとされる戦術など）が正しいかどうかは、ゲームの文脈の中で意味を持ったかどうかで決まるのである。よって、ビデオなどのゲーム映像を学習者に見せて、この後、A、B と C の選択肢があったとして、どれをするのが正しいか、などと尋ねることを戒めている。

著書の後半では、いくつかの種目の指導の具体例が示されている。これらの種目指導について、アメリカのグリフィンらの提唱した TGA (Tactical Games approach : 戦術アプローチ) と比較し、ライトは、前もって身に付けさせたいスキルを用意しない点に Game Sense の特徴があると述べている。現実にも目の前にいる子供たちにとって必要なら、ゲームの文脈の中 (game-like contexts) で学習を行うのであると。

新しい学習指導要領では、何を知っているかではなく、何ができるようになるかが問われている。この転換の論理は、体育にとっては非常に危険なものでもある。「わからなくても、できればいい」という安直な反復練習式動きづくりへの回帰が危惧されるからである。体育授業における球技指導は種目ごとにある動きを身につけるトレーニングではない。また、たとえ身につけたとしても、大人になってから、その“身につけた動き”が有用性を持つことはあまりない。もしそうであれば、一種の教養として、ゲームの中での行為の意味を問うことこそ重要になるのではないかと考えさせられた。

2005年から2006年にかけてドイツ・ケルン体育大学に研究員として籍を置いていた。2006年はFIFAワールドカップがドイツで開催されていたため、ケルンのスタジアムは多くの人で賑わっていたことを記憶している。また、ドイツは、2007年に世界男子ハンドボール選手権大会を開催した年でもあった。もちろん、ハンドボールはドイツにおいてサッカー、テニスに次いで人気のスポーツ種目だけあって盛り上がりを見せていたわけであるが、12会場にわかれた開催地域をみると、必ずしも大都市で開催されていたわけではなかった。12会場のうち、3都市は人口約5万人を下回る都市で開催され、その他、100万人を超えるベルリン、ハンブルク、ケルン以外の会場は、ドイツの中でも中規模都市で開催されていた。現在、ドイツのハンドボールリーグをみても、必ずしも大都市に強豪チームがあるというわけではない。2007年の世界男子ハンドボール選手権大会とドイツの地域におけるハンドボールの定着は私に、「なぜドイツのハンドボールは地方都市に根付いたのか」という関心を掻き立てた。

さて、ここで、これまでの私の研究と関わらせるとすれば、20世紀初頭にドイツで人気を博したハンドボールが如何に日本へ伝播したのかという点と結びつく。すでに広く知られているように、日本にハンドボールを紹介した第一人者は大谷武一である。大谷は文部省留学生として渡米（1917年から1921年）し、その帰途、ドイツのハンドボールを視察した。ドイツ・ヴァイマル期に展開されたハンドボールを大谷は「ハンドボールは秋から冬にかけて最も盛んに活動されている。ハンドボールには、サッカーの長所のほかに、更に臂が使用されるので、一層体育的だ」と回想する（大谷（1960）大谷武一体育書選集Ⅲ，杏林書院，p.183）。当時、ドイツではサッカーと陸上競技といった“スポーツ”が盛んにおこなわれていた。我々が認識しているようにハンドボールもまた、“スポーツ”である。しかし、当時大谷がみたハンドボールは“スポーツ”であり、“体育”であったのかもしれない。これに関連する研究にCh.アイゼンベルクの研究（Eisenberg, Ch.(1993)Massensport in der Weimarer Republik. Ein statistischer Überblick, Archiv für Sozialgeschichte, 33, S.161）がある。当時ハンドボールは体育を重視していたドイツ体操連盟によって大会が開催されていたことが明らかにされている。

果たして、大谷はどのような理念に基づいて日本にハンドボールを根付かせようとしていたのだろうか。

ところで、唐木は、「明治期後半、内村鑑三、新渡戸稲造、岡倉天心、夏目漱石、正岡子規らは、日本と外国との間の如何ともしがたき相違、あるいは日本の後進性に由来する封建遺制と西洋近代との間隙を統一しようとする苦悩があった」と考察する（唐木順三（2001）現代史への試み 京都哲学撰書 第12巻，燈影舎，pp.39-40）。その彼らには苦悩を真に苦悩たらしめ、矛盾を真に矛盾たらしめ、その内心における相剋から創造へ転じ出るエネルギーがあったと唐木は指摘する。単純化しすぎる嫌いがあるが、西洋的なものを日本に定着させようとする際、苦悩や矛盾を内心に秘め、そこから独自の文化を創造することができると、読み取ることができるのではないだろうか。

大谷が日本にハンドボールを広めようとした時の苦悩や矛盾はあったのか。なぜ、体育的であるハンドボールに注目したのか。大谷の内心における相剋から創造へ転じ出るエネルギーを抽出する作業とともに、ドイツにおいて地方都市にハンドボールが根付いた背景を明らかにすることによって、スポーツクラブが地域に根付くためには？という課題に貢献できるよう、今後の研究を進めていきたい。

波多腰克晃(hatakoshi@nittai.ac.jp)

事務局より

新年度の体制や活動計画などを掲載しました。お問い合わせは専門領域事務局担当（高岡英氣：bureau@pdpe.jp）までお願いします。

○体育哲学専門領域新体制 2019-2020

2019/2020 年度期 体育哲学専門領域役員・組織が決定しました。昨年度の体育哲学専門領域運営委員選挙で選出された運営委員を中心に、以下の体制で運営することになります。

代表 関根正美（日本体育大学）
副代表 深澤浩洋（筑波大学）
監事 上泉康樹（広島大学）、小林日出至郎（新潟大学）
幹事 小山凜雄（日本体育大学：庶務）、林洋輔（大阪教育大学：編集）

★運営委員会（◎印は各担当の主任を示します）

庶務・会計担当 ◎高岡英氣（敬愛大学）、田中愛（明星大学）
研究担当 ◎森田啓（千葉工業大学）、坂本拓弥（筑波大学）、大津克哉（東海大学）
大会企画担当 ◎畑孝幸（東海学園大学）、荒牧亜衣（仙台大学）、高橋徹（仙台大学）
広報・編集担当 ◎阿部悟郎（東海大学）、佐々木究（山形大学）、田井健太郎（群馬大学）、高橋浩二（長崎大学）、石垣健二（東海学園大学）

★★常設委員会

☆学会大会企画運営委員会

委員長：畑孝幸（東海学園大学）
委員：荒牧亜衣（仙台大学）

☆選挙管理委員会

委員長：高橋徹（仙台大学）
委員：荒牧亜衣（仙台大学）

☆規則・規定等整備検討専門委員会

委員長：森田啓（千葉工業大学）
委員：高橋浩二（長崎大学）、高岡英氣（敬愛大学）

★★事務局：高岡英氣（敬愛大学）E-mail: bureau@pdpe.jp

〒263-8588 千葉県千葉市稲毛区穴川 1-5-21
敬愛大学経済学部 Tel 043-251-6363(代表)

★★編集事務局：林洋輔（大阪教育大学）E-mail: hyosuke@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

○2019 年度の活動計画

5月 初旬 会報第23巻第1号発行
6月 1日（土）第1回定例研究会
7月 上旬 夏期合宿研究会プログラム発送
13日（土）～15日（月・祝）
夏期合宿研究会・運営委員会（定例）
8月 中旬 会報第23巻第2号発行
9月 10日（火）～12日（木）

日本体育学会 70 回大会 総会・運営委員会（定例）

- 11 月 中旬 会報第 23 巻第 3 号発行
- 12 月 上旬（土）第 2 回定例研究会
- 2 月 中旬 会報第 23 巻第 4 号発行
- 3 月 上旬（土）第 3 回定例研究会
- 3 月 31 日 「体育哲学年報」第 50 号発行

○住所等変更及びメーリングリストについて

異動により、所属先や住所等、会員情報に変更があった方は、事務局（bureau@pdpe.jp）までご一報ください。また、メーリングリストに登録いただきますと、電子メールによって会報が配信されます。速報性、経済性、専門領域活性化の観点から、是非ともご登録をお願い申し上げます。こちらも事務局（bureau@pdpe.jp）までご一報ください。

定例研究会のお知らせ

森田 啓（千葉工業大学）

令和元年度第 1 回定例研究会を 2019 年 6 月 1 日（土）に下記の要領で開催いたします。研究会終了後 18 時 30 分より懇親会を予定しております。会員の皆さま、ぜひともご参集ください。なお、当該年度定例研究会でのご発表等に関するご要望等につきましては、定例研究会担当（森田 啓：hirakumorita@p.chibakoudai.jp）までお寄せ下さい。

- ・日時：6 月 1 日（土）15：00～18：00（予定）
- ・会 場：〒112-0012
東京都文京区大塚 3-29-1
筑波大学東京キャンパス 122 号室
- ・アクセス：東京メトロ 丸の内線
「茗荷谷」駅より徒歩 5 分程度

・アクセスマップ：

http://www.tsukuba.ac.jp/access/bunkyo_access.html



★発表内容（予定）

【第 1 部 シンポジウム「体育・スポーツ哲学の授業実践」】

松宮智生（清和大学）「スポーツのルールを考える」

森田啓（千葉工業大学）「具体的事例から考える体育・スポーツ哲学」

【要旨①】スポーツのルールを考える 松宮智生

本報告では、2010 年 FIFA・W 杯の準々決勝において、スアレス（ウルグアイ）が意図的なハンドのファウルを犯した事例を素材にした授業（体育原理等）を紹介する。受講学生のみなさんに考えてもらったテーマは次のとおり。「あるサッカーの試合（体育の授業または少年サッカーの練習試合）の終了間際、1-1 の同点の場面において、小学 5 年のスアレス君が意図的なハンド（反則）によって相手のゴールを防ぎました。レフェリー兼指導者であるあなたはどのような判定（あるいは指導）をしますか？」

【要旨②】具体的事例から考える体育・スポーツ哲学 森田 啓

本報告では、体育・スポーツ哲学に興味をもってもらうために具体的事例から考察する授業について報告する。具体的事例について受講学生が考えて回答するアクティブラーニングを導入することにより、受講学生に興味を持ってもらうことが可能ではないかと考えている。これまでいくつかの具体的事例を扱ってきたが、本報告でもいくつかの事例を報告する。

【第2部 一般発表】

① 大学生選手の技能向上を促す優れた指導者の運動観察内容の分析

金谷麻里子（筑波大学）

スポーツの指導には選手の動きを見ることが不可欠である。なぜなら、指導者が選手の技能向上に直接関与しようとするならば、動きを見ることが、すなわち運動観察を通して、選手自身が何を意図して、どのように行っているのか、また実施に伴ってどのようなことを感じているのかを把握する必要があるからである。

本研究は、大学生選手の技術指導に定評がある指導者に着目し、練習場面における運動観察内容について検討するものである。

② スポーツ行為の内的契機に関する検討ーカントの義務論を手がかりにー

水島徳彦（東海大学大学院）

スポーツの、とりわけ競技スポーツでの行為全般において、競技者は競技中、競技外に関わらず常に選択を求められる。それらの行為にまつわる道徳的な議論は後を絶たない。本研究では、スポーツにおける行為者の純粋な内的契機に関する検討を試みる。ここではカントの道徳論のうち、とりわけ、義務論を手がかりにしてみたい。

箱根合宿研究会 情報

箱根合宿研究会 2019 in HAKONE - さよなら箱根静雲荘 -

大津克哉（東海大学）

本年度も下記の要領で夏期合宿研究会を開催します。今回も土日・祝日（海の日）の日程を組みました。また、特別企画につきまして、企画案を募集します。奮ってご参加下さい。先日、静雲荘が閉館するという連絡が入りました。2019年9月1日(日)で営業終了とのこと。長年にわたりお世話になってきましたが…。ぜひこの機会、最後の思い出に！

- ・期日：2019年7月13日（土）、14日（日）、15日（月・祝日）
- ・場所：静雲荘

（住所）〒250-0408 神奈川県足柄下郡箱根町強羅 1320 （電話）0460-82-3591

小田原駅より箱根登山鉄道にて終点・強羅下車/改札口を出て右手地下道をくぐり直進/道なりに左にカーブする坂道を約120m登った右手にあります。

☆日程表（申込みの状況によって、多少変更になることがあります）（*は運営委員会）

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
13日（土）							受付	研究会①				夕食		
14日（日）	朝食		研究会②			昼食*	研究会③					懇親会		
15日（月）	朝食		研究会④			事務協議	解散							

☆特別企画：企画募集

かつて実施しましたラウンドテーブル形式でも、その他の形式でも結構です。企画に関する

ご提案・ご意見をお寄せください。大津 (otsu@tokai-u.jp) までよろしくお願いたします。

☆費用：23,000 円 (予定)

- ・研究会参加費：3,000 円
- ・宿泊費等：20,000 円 (全日程参加の場合/2 泊朝夕食, 懇親会費を含む)
- ・シングルでの宿泊も申し受けます。先着 3 名まで, 追加料金：1 泊 3,000 円 (予定)
- ・学生, 院生, 研究生には若干の宿泊費の補助があります。奮ってご参加下さい。

☆6 月 21 日 (金) 必着にてお申込み下さい。

- ・Eメール：お名前, ご所属, 連絡先, 発表演題, 宿泊のご予定 (食事の有無を含む) について, 東海大学 大津 (otsu@tokai-u.jp) までお知らせください。
- ・特に, 部分参加の場合は, 宿泊および食事の要・不要について正確にお知らせ下さい。[13 夕食, 13 宿泊, 14 朝食, 14 昼食, 14 夕食, 14 宿泊, 15 朝食]
- ・参加予定に変更が生じた場合は, 速やかに担当者までご連絡下さい。
- ・7 月 5 日 (金) 以降のキャンセルについては不泊料金が必要となります。
- ・不参加の方で近況報告をいただける方は担当者までご連絡下さい。

☆詳しい「プログラム」は, 7 月上旬にお送りする予定です。(お問い合わせは, なるべく E-mail またはファクスをご利用下さい。)

夏期合宿研究会担当運営委員：大津克哉

〒259-1292 神奈川県平塚市北金目 4-1-1

東海大学 体育学部 スポーツ・レジャーマネジメント学科

E-mail: otsu@tokai-u.jp Tel: 0463-58-1211 (代表) Fax: 0463-50-2056

○「日本体育学会第 70 回大会」について

日本体育学会第 70 回大会(慶應義塾大学)のオンライン参加・発表登録を受付けております。登録締切は 5 月 17 日 (金) 13 時 (厳守) となっております。 <https://ipe.hc.keio.ac.jp/jspe70/> からお申し込みください。多数のご発表, ご参加をお願いいたします。

次号予告!

次号は研究情報のほか, 箱根合宿参加報告, 学会大会情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下さいます方は, 広報担当 (佐々木究: sasaki@e.yamagata-u.ac.jp) までお問い合わせ下さい。

.....

体育哲学専門領域会報第 23 巻第 1 号

発行者 日本体育学会体育哲学専門領域
関根正美 (代表)

編集者 佐々木究, 田井健太郎, 阿部悟郎 (広報担当)

発行日 平成 31 年 4 月 25 日

連絡先 〒263-8588
千葉県千葉市稲毛区穴川 1-5-21
敬愛大学経済学部 高岡英氣 気付
電話: 043-251-6363 (代表)

【編集後記】

体育哲学専門領域会報が手もとに届くこと 10 数年 (名称変更含む)。直近の時事問題に対しての体育哲学的視点からの意見や最新知見の紹介を定期的に拝見する機会を得てきました。情報提供に留まらない貴重な内容であったと改めて感じ入っております。その会報をよもや担当する時がくるとは。本会報が, 会員の皆さまの **Inspiration** のきっかけとなりますよう努力いたします。ご協力どうぞよろしくお願いいたします。(T)